ローマ字論者の言うように、ローマ字で国語学習の負担がほんとに軽くなるなら、わが国が 45 分で国語科学習を済ませているのに、アメリカやフランスが、120 分から 180 分もの時間を、国語の学習に当てている、ということは、どう考えてもつじつまが合いません。字数がほんとうに学習の難易に関係があるものなら、漢字が教育漢字だけで 880 字あるのに対して、ローマ字は 26 字ですから、比率は 1 対 34 になります。わが国が 45 分かかるなら、アメリカやフランスでは、一日三分の学習で間に合う道理です。ところが実際には、逆に、わが国の三倍から四倍という時間を配当しているのですから、「文字数の多いことは、学習の負担を重くするものではない」ことは明らかです。そこで、今次は、「漢字がなぜ国語学習の負担を軽減するか」ということについて、考えてみたいと思います。

英語の one two にせよ、国語の「いち」「に」にせよ、表音文字では、すべてその文字が、直接には決してその意表、内容を表示しません。one が「ひとつという意義、内容を持ち、wʌn と発音される言葉」を表す文字の集まりである、という約束によって、私たちは、one からその意義内容を読み取っているのです。また、かなの場合は、「いち」が「いち（表記は、『市』『位置』と同じ）という発音で、ひとつという意義、内容を持った言葉」を表す文字の集まりである、という約束によって、「いち」からその意義、内容を読み取っているのです。だから、かなの揚合、表音に忠実ですが（英語では、同じ発音の言葉でも、peace と piece, sea と see, write と right のように書き分けています）それだけに、文脈から適当な意義をとっさの間に選択しなければならず、それができないかぎり、発音だけの再生に止まって意味の読み取りのできない欠点があります。ですから、表音文字ではこの約束がよく理解され記憶されないうちは、意味の読み取りがすらすらと行われず、その理解・習得のためには、多くの学習時間を必要とする、というわけなのです。これが欧米諸国において、使用する文字が少いのに、多くの国語学習の時間を必要としている理由なのです。

これに対して、漢字は、「一」「二」の字形が、そのままその意義、内容を表しているので、特別に練習をする必要もなく、即座に理解でき、記憶できるのです。漢字の場合の約束は、ローマ字やかなの場合と違って、構造的であり、論理的ですので、理解や記憶が容易であるばかりでなく、一度記憶できたものは長く保持されて、忘れられることがないのです。ですから、漢字の字数の多いことは、国語の学習に少しも負担にならないばかりか、言葉に対して一つ一つ論理的に対応して、言葉の理解を容易にし、記憶を確実にしているので、国語学皆を能率的にしているのです。

私のこの考え方は道理に合っていると思いますが、もし、この考え方に誤りがあるなら、ぜひ御指摘いただきたいと思います。